

現代アジア児童文学

アジア地域共同出版計画会議 企画
ユネスコ・アジア文化センター 編

バリおくさまの バス旅行

松岡享子 監訳



現代アジア児童文学選

アジア地域共同出版計画会議 企画
ユネスコ・アジア文化センター 編

バリおくさまの バス旅行

松岡享子 監訳

東京書籍

現代アジア児童文学選 1

バリおくさまのバス旅行

昭和57年4月1日 第1版第1刷発行
昭和57年6月18日 第1版第2刷発行

訳者 梅田博之・小野 章
君島久子・坪井郁美
張替恵子・間崎ルリ子
松井由紀子・松岡享子
松永富美子・松野正子

発行者 小高民雄

発行所 東京書籍株式会社
東京都台東区台東1-5-18 〒110

印刷・製本 図書印刷株式会社

定価1200円

©1982, Printed in Japan

乱丁・落丁の場合はお取替いたします

8397-518046-5313

現代アジア児童文学選 — 1

バリおくさまのバス旅行

も

く

じ

アフガニスタン

にげたタカ

5

ビルマ

ぼくは大どろぼうにはならないぞ

15

インド

バリおくさまのバス旅行

27

インドネシア

クナリの実

45

イラン

詩人と太陽

57

韓国

ユニは牛が大きい

69

マレーシア ふたりはやっぱり仲よし 77

ネパール 笛のおくりもの 95

パキスタン ツヌーとろば 111

フィリピン 手紙 123

シンガポール ユスフとねこ 133

スリ・ランカ 家ほどもあるちようちんの話 155

タイ たまご割りあそびのチャンピオン 173

中国 海辺のできごと 185

● 翻訳者一覧

にげたタカ

小野 章

ぼくは大どろぼうにはならないぞ
バリおくさまのバス旅行

松岡享子
松野正子

クナリの実

松井由紀子

詩人と太陽

松岡享子

ユニは牛が大きらい

梅田博之

ふたりはやっぱり仲よし

松永富美子

笛のおくりもの

間崎ルリ子

ツヌーとろば

松野正子

手紙

張替恵子

ユスフとねこ

間崎ルリ子

家ほどもあるちようちんの話

坪井郁美

タマゴ割りあそびのチャンピオン

小野 章

海辺のできごと

君島久子

アフガニスタン

にげたタカ

アハザム・ラフナワルド・ザルヤーブ 作

ハーシム・ゴルバンディ 画

小野 章 訳

わたしの町の通りには、むかしから枯れ木が立っていた。そのそばには靴直しが小さな店を持っていた。朝早く店をあげ、夕暮れには店をしめ、ドアに大きな錠をおろした。この通りにはなにもせず過ごしている男がふたりいたが、どうしてこのふたりが仕事についていないのか、わたしは知らない。とにかく、ふたりはこの通りにおかれた備えつけの家具みたいに、毎日、靴直しの店さきでぶらぶらしているだけだった。

ある日、その店さきを通りすぎようとしたら、靴直しがいつものようにきげんよくおしやべりをしていないのに気がついた。かれはうつむいて、なにか思いにふけていた。ふたりの男たちもしげすわりこみ、うつむいて考えこんでいる。そのとき、わたしはふたりが靴直しのまねをしているのだろうと思った。おそらく、そうだっただろうが——それにしても、おろかなひとまねだ。

なにか変事でも起こったのかと思って、わたしは店に近づき、靴直しに声をかけた。「どうしたのかい？」

靴直しはのろのろと顔をあげ、わたしを見た。いつもなら、かれの目はきげんよく、ぱっと明るくなるのだが、今、おしだまっているその顔にはなんとなく悲しそうな表情がうかんでいるだけだった。店さきにすわっていたふたりの男たちも、顔をあげてわたしを見たが、その顔にはなんの表情もなかった。

「おれのハイタカが——にげてしまった。」と、靴直しはいった。

そのことばをきいて、わたしの胸は明るくなった。「どうやってにげたんた？」と
ききかえしたが、タカが自由になったこと
を喜んでいるのが顔に出たのだろう。

靴直しはそれに気がついたにちがいない。
とつぜん、けたたましくわらいだした。と、
すぐふたりの男たちも、いっしょになって
わらった。靴直しのわらい方にはわたしに
対する悪意のようなものがこめられていた。
「なぜ、わらう？」と、わたしはいった。
「なぜって？ あのないまいましいタカは、
——もうすぐ死ぬからさ。」と、かれはいっ
た。

「なぜ、死ぬんだ？」

「あいつの足には長いひもが結んだまんま
だからだよ。」と、かれはいったが、そのと



きにはもうきげんのいい表情にもどっていた。「すぐにあいつは木の枝にとまる。そしたら、ひもが小枝にまきついて、あいつは身動きできなくて、死んでしまうってわけだ。」というと、かれはまた声をあげてわらい、それから、つけ加えた。「強いひもだ。どんな鳥でもあれは食いちぎれないぞ。」

心の中は喜びが消え、心配で暗くなった。ふたりの男は靴直しのことばをくり返した。「どんな鳥でも食いちぎれない……。どんな鳥でも食いちぎれない。」

「あのタカは自分の死を道連れににげた。」と、靴直しはいった。

「ひどいやつだ。おまえは。」と、わたしはいった。

かれは目をきらきらと光らせていった。「おれはあいつに生きたスズメをえさにやっていた。タカは喜んでスズメを殺し、食べたぞ。それをにげ出しやがって、おれは……。」

わたしはそれ以上きかず、道を急いだ。かれのことばが耳についてはなれなかった。「あいつの足には長いひもが結んである。そのひもが小枝にからんで、あいつは死ぬまで枝から飛びたてない。タカはひもを食いちぎれない。強いひもだ。どんな鳥でもあのひもは食いちぎれない……。！ 食いちぎれるもんか。」

いやな夜だった。わたしはねむれなかった。重い夜の暗やみがわたしの胸にのしかかっていた。窓から見える通りはねしずまっている。暗い夜はわたしに暗い気持ちと悲しみしか感じさせなかった。なん度もわたしはねようとした。しかし、心の奥底のどこかで、ある思いがふくれあがってくる。わ

たしはその思いを意識にひきずり出そうとしたが、なん度やってみても、どうしてもその思いは出てこない。なにかがそれをひきもどして、かくしてしまう。その思いそのものは自由になろうともがいているのに、どうしてもひきもどされてしまうのだった。夜はふけていったが、わたしはもどかしい思いになやまされるだけだ。

やがて暗やみは消えはじめた。夢うつつでわたしはひもがいつぱいさがっている世界を見ていたようだ。長いひももあるれば、短いひもある。わたしの町の通りもひもでいつぱいだった。太いひもあれば、細いひももあったが、どのひもも強くてひきちぎれない。とつぜん、そ



のひもはみんなだれかの足に結びつけられているのがわかった。みんな、足に一本のひもを結びつけているのだ。わたしの足にもそのひもは結んであった。

わたしは身ぶるいをして、目をさました。朝だった。そうぞうしいさげび声^{こゑ}が通りからきこえてきた。外に出ると、靴直しの店のそばの枯れ木に人が集まっていた。靴直しもそこにいて、おどりまわるようにうろうろしてさけんでいる。かれはわたしを見つけると、とびあがって近づいてきた。「どうだ——おれがいったとおりだろう！」

「なにがだ？」と、わたしはいった。

「ちよつときてみるよ。」というと、かれはわたしの腕^{うで}をつかんで、枯れ木に近づき、枝を指さした。

「あれを見ろよ！」

ハイタカが枝にさがっていた。足に結んだひもが枝にまきついて、飛ぼうとして死にものぐるいで羽^はばたいたのだろうか。あたりいちめんに羽毛^{うも}が飛び散っていた。鳥はもう死んでいた。首は下にだらりとさがり、生^{せい}気のない目はわたしを見つめているようだった。鳥がにがにがしい声で「道は行き止まりだ。もう先へは行けない。」といっているのが、きこえるような気がした。

「どうだ？」と、靴直しがいった。「すぐに死ぬといっただろうか。」

集まった人たちはなにかさげび、死んだ鳥を指さしていた。その目はおろかな喜びと満足感でいきいきしているようだ。まるで夢中^{しゅうちゅう}になっているとわたしは思った。「よかったなあ、つるされたのは

おれたちでなくて、鳥でよかったなあ！」
と思っているのだ。

わたしは集まっている人の足を見た。その足にはみんなひもが結びつけられていた。強いひもだ。靴直しの足にもひもが結びつけている。どのひもにも輪結びわじりがついていて、その輪結びのひとつひとつがことばの形をしていた。そのことばは自我エゴだ。

わたしは、わらいだした。「なぜ、わらう？」と、みんなはわたしにいった。返事もせずに、わたしはただわらいつづけた。おしまいにはわたしのわらい声が通りにひびきわたっていた。

「なぜ、わらう？」と、靴直しが大きな陰いん気な声でさけぶようにいった。

「みんな——みんな、足にひもを結びつけ



ているじゃないか。」と、わたしはこたえた。

おびえたような目でみんなは自分の足を見た。「どこに？　どんなひもだ？」

わたしはこたえず、自分の足を見ていた。わたしの足にも、輪結びがついたひもが結びつけられて



いた。輪結びは自我エゴということばの形をしていた。自我……自我……自我……自我。

わたしの心の奥底にとじこめられていた思いが、なんであったか、とうとうわかった。とつぜん、世の中のことがすべてあほらしくなり、わたしはまたわらいだしていた。

わたしたちはみんな枯れ木の枝にひもで結ばれてぶらさがっていた。わたしの横には靴直しがわたしに顔を向けてさがっている。その悲しそうな顔がいつているようだ。「道は行き止まりだ。もう先へは行けない。」ふたりの男もぶらさがって、おなじように悲しそうな顔をしている——おろかなひとまねだ。

タカが別の枝にさがっているのを見つけた。「なぜ、もどってきたんだ？」とわたしは考えた。そのとき、タカの足にはもう一本、別のひもが結びつき、それがずっと靴直しの店につながっているのに気づいた。そして、そのひもは生きたスズメでできたひもだった。

